

本学の教学改革と中国語教育の方向性

— 他大学の先行事例に学びつつ —

張 宏 波

はじめに

近年の中国語教育法をめぐる議論は、初学者が躓きやすい補語等の文法項目や発音の効果的な教え方といった積年の課題への対処策を扱うものから⁽¹⁾、日々発展する情報コミュニケーション技術やデジタル機器の活用による学習法の多角化を検討するものまで⁽²⁾、実に多様化している。しかし、複雑化・細分化しているかに見える議論や取り組みの底流には、時代の変化に向き合う大きな問題意識が共有されている。つまり、教員が学生に一方的に知識を伝達してその定着を目標とする〈教授〉スタイルから、学生自身が周囲の社会状況や学生同士の相互作用を通じて学びを構成していく〈学習〉スタイルへの移行がそれである。中国語能力を「21世紀型スキルの養成」の一環として開発する必要性を訴えている植村は、こうした教育理論の変化の潮流を「客観主義から社会構成主義へ」といったパラダイム・シフトとして捉えている。後者は、「与えられた知識を吸収することよりも、学習者自らが問題を見つけ、解決方法を探ることのできる力、メタ認知能力を養うことに重点が置かれて」いる点で、グローバルな時代に対応する能力を養成していくものと位置付けられている⁽³⁾。

こうした趨勢はもちろん中国語教育に限られた

ものではない。筆者は、学内の助成を活用して大学コンソーシアム京都主催の「FD フォーラム」や「初年次教育学会大会」にここ数年毎年のように参加し、多くの大学の多様な分野で行われている教育改革や初年次教育をめぐる真摯な実践から多くを学んでいる。そこでも大学や分野を越えた問題意識として、学びへの動機付けを所与の前提とせず、動機付けそのものを引き出していくところから働きかけ、学びの主体者として学生を育てていく必要性が共有されていた⁽⁴⁾。

本学においても、こうした潮流のなかで教学改革が推進されている。自己点検推進室が大学ホームページ上で発表している「自己点検」「外部評価」「外部評価への回答」等を見ればそうした方向性が明らかである。例えば、2013年度に外部評価委員会が示した提言に対する鶴殿博喜学長の回答の一つに、「授業への学生の主体的参加を促す方法」という項目がある。その具体策として「授業の中でグループワーク、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーションなど」を「取り入れている科目は現状でも900コマ近く」とあり、「全学的に共有し」ていく方向性を打ち出している。また、「授業や科目ごとだけでなく学部単位・学科単位の教育活動のプロジェクトとして」教学改革支援制度を設け、4つの先行モデルを採択・実施したことを報告している。モデルの内訳は、経済学部留学生支援、法学部のキャリア教

育支援に加え、国際学部と教養教育センターの語学教育支援となっている⁽⁵⁾。ここからだけでも、学生を主体者にした授業内外の働きかけを通じて、複雑化・高度化する現在のグローバル社会に対応できる学生を育成しようとする本学の基本指針が確認できる。ただ、外部評価委員会からも「これらの取り組み、新しい教育方法は、各学部・教員にとって経験が浅いので、現場の取り組みの実際と教育効果の測定、活用方法を浸透させるための全学的なスパイラルアップ活動が必要である」とコメントされている通り⁽⁶⁾、まだ模索中の段階にあるといえる。

この点は中国語教育を担当している筆者も実感しているところであり、後に検討するように、中国語ランゲージ・라운ジの開催や留学生ラーニング・アシスタントの授業への活用といった新しい試みを通じて、学生の多様なニーズに対応し、基礎的能力を高めていく取り組みを行っているが、現状の成果の検討を踏まえつつ、それこそ学生と共にプログラムを構築していく必要があると考えている。また、現状では「プログラム」や「プロジェクト」という名に反して教員個人の努力に負う部分も大きいと、学生の要望に十分に答えきれていないという限界も感じている。

そこで本稿では、現在本学も含めた日本の大学教育の現場で基本的な趨勢となりつつある、学生を主体者とする新たな時代の〈学び〉の仕組みを、とりわけ筆者が担当している中国語教育の部門でさらに推進していくために必要な課題について、プログラムの現状を検討しながら明らかにしていきたい。

中国語教育をめぐる現状においては、授業改革、留学プログラムの整備、課外教育の取り組み、キャリア教育などがそれぞれ個別に行われていることが問題であると考えている。グローバル化が進

んで中国との結びつきが良い意味でも悪い意味でも強くなっている複雑な現実に対して、中国語を含めた学習能力を学生が主体的に構築していくためには、それらを有機的に結びつけることで、全体性を見通せるプログラムを提供していくことが重要だと考えている。これは、単に大学内の各部局の連携を深めるという学内行政的な提言をするものではない。大学そのものが、大学の目指す〈社会構成主義〉的な教育改革に沿う形で自己変革を遂げ、それに見合うプログラムを提供するための視座を提示したいと考えている。

以下では、現状の中国語教育の問題点を自己分析したうえで、一定の展望を示すために、個別のになりがちな取り組みが有機的に関連づけられたことで大きな成果をあげている亜細亜大学の先行事例を検討する。

1. 本学の教学改革の方向性

中国語教育のあり方を検討し、展望していくためには、本学の教育環境整備の文脈を踏まえた上で論じていく必要がある。そこで、本学における「自己点検」およびそれに対する「外部委員の提言」、さらにそれに対する大学執行部の「回答」を検討することで、大学がどのような方向性で時代に対応した自己変革を遂げようとしているのか確認していきたい。

1-1 2011年度：多様化・複雑化する教育現場への対応としての「互学」の推進

2011年度の外部評価委員会の提言に対する「回答」では、大学執行部が交代したことに伴い、「現執行部の新たな視点」や「現在の学生支援体制の概要」などの全体的な姿勢について冒頭で記されている⁽⁷⁾。

「1. 学生支援体制について」の項では、主にメンタルな面で課題を抱えている学生を念頭に置いた内容とはいえ、「学生支援の多様化、複雑化への対応は待ったなしの状態にあります」（1 頁）という切迫した問題意識が表明されている。混沌とした社会状況や格差の拡大などの影響で学生の様子が多様化していることは普通の学生との接触からも感じられるところであり、個別の相談や配慮を要するケースも珍しくなくなっている。多様化・複雑化する新たな局面に対する対応の必要性を第一に記している点に、現在の大学が置かれた状況が象徴されている。

実際に、この箇所に続いて「本学の自己点検・評価では『学生支援』を障がい者支援のみならず、すべての学生の修学支援、生活支援、キャリア支援等を含めて幅広くとらえ、『互学』（能動的に教え合い学び合う）をキーワードに据えています」（1 頁）と記しており、学生生活の多様な側面について学生の能動性を促していくために、大学が積極的に支援していく姿勢が表明されている。

また、「国際学部以外のすべての学部がある白金キャンパスでは、学部・学科・学年を超えた学びができる仕組みづくりを検討しています。『互学』キャンパス整備として、動線や用途を考慮した施設の再整備、無線 LAN エリアの拡大、学生アメニティの向上、ポータルサイトの機能向上等により、自学自習環境に着手しています」（2 頁）とあるように、従来の学内の様々な垣根を越えて学生たちが繋がり合い、学生が様々なネットワークのなかで自律的な学習を積み重ね、成長していくための環境整備が必要であることが認識されている。グローバル化によって越境化が進み、多様な文化が交錯する状況のなかで自己の見直しが迫られている時代や社会の潮流に、大学も対応しようとしている現れといえるだろう。

具体的な支援のあり方としては、それまでは十分に組み込まれてこなかった分野にも力が入れている。例えば、キャリア支援においては、それを「互いにキャリアについて考え学ぶ仕組みづくり」と位置付け、「学生・卒業生・社会人が立場を越えて互いに学び合うキャリア教育、ボランティア・正課外活動等を通じた『共生社会の担い手』の意識醸成、キャリア教育科目（正課）による受動的な『気づき』のきっかけづくり、女性のキャリア形成支援等を検討して」（2 頁）いるという。単なるキャリア支援教育、ボランティア教育の次元にとどまらず、経験や立場を越えて互いに結びつき、学び合うという志向性がここでも重視されている。

次に、「回答」の各論のなかで中国語教育に関連する分野として、「5. 国際交流，社会貢献，その他」の項に注目しておきたい。「全学的な留学生拡大に向けた戦略と計画」の「具体的な方策として、語学教育の活性化（学部学科の特徴を踏まえた語学教育、ランゲージスクール・ランゲージラウンジ構想）、海外への派遣の活性化（協定校の拡充・新規プログラムの検討、派遣留学希望者の語学力向上に向けた取り組み、奨学金拡充）等を検討」（5 頁）しているとされる。この点は2011 年7 月に「学長の所信表明の中で明らかに」した内容でもあると指摘されており、語学担当教員である鶴殿学長の独自色が表われているといえよう。「語学教育の活性化」「海外への派遣の活性化」が取り上げられているのは、グローバル化への対応を謳う大学として現状の語学教育や留学制度には大きな課題が横たわっているとの現状認識があるといえる。具体策として例示されている「学部学科の特徴を踏まえた語学教育」とは、所属学部にかかわらず学が基礎的・普遍的な語学授業にとどまらないレベルの対応が必要だという認

識の表明であろう。経済学部における「ビジネス中国語」や、国際学部における「専門外国語」（上級レベル）の開講がその一端だといえる。「ランゲージ・ラウンジ」については後述するが、教養教育センターで近年主催している課外の語学学習の場であり、その全学的展開が検討されていることも、授業にとどまらない自発的な「互学」の場を大学が重視している文脈のなかに位置付けられる。

1-2 2012 年度：外国語の「互学」教育にむけたさらなる環境整備

「多様化するニーズに対応し、グローバル人材を育成する」（5 頁）という目標は「2012 年度外部評価委員会の提言について（回答）」をみても不変である^⑧。語学教育については、前年度に続いて「全学的な視野に立ったカリキュラムや教授法の見直しをしている最中であり、迅速な改善を目指して」（2 頁）いとされ、重要課題の一つにあげられている。特に、英語教育に関しては『「学生目線での語学教育」』『キャリア教育の視点からの語学教育』『学部専門教育の視点からの語学教育』と 3 つの視点からの再構築を図」（2 頁）っているとし、従来型の一方向的な〈教授〉スタイルからの転換が強く意識され、時代の要請に見合ったカリキュラムの整備が進められようとしている。この 3 つの視点は、英語以外の初習語教育にも当てはまることは言うまでもない。中国語教育のあり方を検討する本稿においても、「学生目線」や「キャリア教育」との関連性については後に言及する。

また、前年度も語学教育の活性化対策の一つにあげられていた「ランゲージ・ラウンジ」が、以下のようにさらに強く押し出されている。「教養教育センターが開設しているランゲージ・ラウン

ジを大学全体規模の位置づけとしてその充実を図り、学部学科学年を超えて『語学』を『互いに学ぶ（互学）』できる空間となるようなランゲージ・センターの将来的な設置に向けて整備を推進しております」（3 頁）。学部や学年の垣根を越えて集い合うことで、ボーダーレス化が進む現実社会を先取的に体験し、そこで主体的・能動的に学ぶ合う「互学」の実践を通じて、グローバル社会に対応できる能力を育成しようとする大学側の狙いが示されている。実際に「今後は、英語以外の語学も視野に入れた包括的な語学教育を目指しており、『語学の明治学院』という評価を再び頂戴できるよう構想して」（3 頁）いと記されている。「英語の明治学院」から「語学の明治学院」への発展を図ることで、グローバル化の進展に対する学生および社会からのニーズに対応しようとする姿勢が強く感じられる。

1-3 2013 年度：留学生との「互学」を視野に入れた外国語教育の模索

大学自身による「自己点検・評価報告書」は 2013 年度版が最新であるため^⑨、ここでも本学の自己改革像を語学教育を中心に確認しておきたい。

「学生の主体的参加を促す新しい授業方法構築の取り組み」の項では、「学生の課外学修支援として教養教育センターが主体とな」って推進しているアカデミックリテラシー（論文・レポートの書き方指導科目）、ランゲージ・ラウンジ、各種語学講座（語学検定試験対策）などが取り上げられ、「学生の学習意欲を刺激する取り組み」（2-3 頁）として位置付けられている。このうち、ランゲージ・ラウンジについては引き続き重視されており、「全学生を対象として、ネイティブ講師や留学生を相手に、英語・スペイン語・ドイツ語・

韓国語・中国語のコミュニケーション力向上や学習相談等、学生のそれぞれのニーズにより活用できる」場として、「2015年度までに全学的な組織に規模を拡充する計画」が展望されている。

ここでは、ランゲージ・라운ジの運営に留学生が加わるようになった点に注目したい。課外の語学学習支援の場に留学生との交流の機会を設けることは、「互学」を重視する本学の基本姿勢に合致するものであり、これまで別々に行われてきた留学生支援と語学教育とをリンクさせる点でも新たな方向性といえる。

大学はこうした新たな試みを後押しする指針を打ち出しており、「授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施」の項で、「2013年度から、学部教学改革を支援する目的で、各学部のそれぞれの取り組みに対し学内助成金を支給して計画の後押しをする『教学改革支援制度』を導入し、教育方法など新しい取り組みや試みを積極的に支援している」(19頁)と述べる。

この「教学改革支援制度」には学内から以下の4件が採択されたことが、「2013年度外部委員会の提言」に対する大学の「回答」の中で記されている⁽¹⁰⁾。経済学部の「正規留学生に対する教育支援プロジェクト」、法学部の「法学部キャリア支援プロジェクト——社会人基礎力の育成——」、国際学部国際学科の「言語運用能力向上プロジェクト」、教養教育センターの「学生による外国語相互学習支援システムの構築」が、「他の学部学科の先行モデルとなる取り組み」として採択された(1頁)。このうち、正規留学生の支援は上記「自己点検・評価報告書」のなかでこれまで手薄と指摘されてきた分野であり、キャリア教育はここ数年重点的に取り組まれている分野である。語学に関する2件のプロジェクトは、グローバル化あるいは「共生」への対応を重視して語学教育に

資源を集中する姿勢があらためて示されている。

なお、教養教育センターの「学生による外国語相互学習支援システムの構築」は正規授業のなかで留学生と日本人学生とが「互学」を実際に進める試みで、中国語授業の中でも試験的に導入していることから、次節以降で検討する。

ここまで確認してきたように、現在本学で進められている教学支援改革は、グローバル化の進展による多様な文化の接触で複雑化・高度化する現実に対応できる学生を育成することを目的に、主体的・能動的な〈学び〉へと切り替えていくための学習環境の整備に力が入れている。これは、本学の教育理念である「Do for Others」を「互学」という新しい教育指針として具体化させていくとするものと考えられる。

こうした取り組みは努力の途上にあり、既存の教育指針の大きな転換を意味することから、各段階の到達度をたえず振り返りながら、残された課題や新たな問題を確認しつつ推進していく必要がある。以下では、筆者が担当する中国語教育の部門で現在進められている「互学」的取り組みとして、「中国語ランゲージ・라운ジ」および「正規留学生ラーニング・アシスタントの活用」について検討していきたい。

2. 中国語ランゲージ・라운ジ「中文会話倶楽部」の現状と課題

2-1 開設の経緯と現状

現在、英語・スペイン語・ドイツ語・韓国語・中国語の外国語部門のそれぞれで、ランゲージ・라운ジが開設されている。中国語部門では「中文会話倶楽部」として2008年6月から毎週1回昼休みを中心に、年度によっては3限の時間帯まで延長して実施している。中国語による気軽なコ

コミュニケーションから学習相談まで、授業外の中国語学習に関する要望に幅広く対応する場として

いる。

開設の経緯は、授業内容に関する質問や補習を要望する学生の声が複数寄せられたことが発端だった。本学に限らず初習外国語科目の担当教員のうち非常勤教員が占める割合は高く、授業後に質問や補習の必要性を感じても学生はいつどこを訪ねればいいのか分からない状況に直面することがある。短い休憩時間だけでは教員も対応が困難で、移動時間も必要である。こうした事情から、共通科目の担当部署に相談に訪れたり、中国語専任教員を自力で調べて研究室を訪ねてきた学生の相談や補習に筆者が応じるようになった。そうした学生が少ないうちは個別対応ができたものの、中国語履修者が年々増加し、就職活動で中国語能力を活用・証明したい学生などが増えるようになったことから、課外で中国語学習全般の相談に応じるため、当時中国語のみ未開設だったランゲージ・ラウンジを「中文会話倶楽部」として開設することになった。

これまでに対応してきた内容としては、①授業で学んだ発音や文型を使ってネイティブ教員や留学生と会話・コミュニケーションしてみたい学生のための「場」の提供、②発音の個別チェック、授業内容や課題に関する疑問点・質問への対応といった授業の補習、③授業内容をさらに深め、中国語作文の上達法といったより高度な学習・自習方法の相談・指導、④就職活動を見すえて中国語関連の資格を取得したい学生から要望の多い、検定試験の概要や学習法、対策講座などに関する相談、⑤短期および長期の中国語圏への留学制度に関する概要や中国事情の紹介、留学先の選定、学習・準備の方法などに関する相談・指導、⑥高校までの学習経験あるいは中国語圏での生活経験な

どを有し、入門段階の授業が不要な学生への対応、などを行ってきた。授業内容についてだけでなく、様々な形で語学力を高めるための多様なニーズが存在している。こうした学生の要望に丁寧かつ十分な対応ができるかどうかは、大学に対する学生の評価や学習意欲の向上に直接繋がるため、初歩的な環境として「中文会話倶楽部」で一定の役割を果たそうとしてきた。

しかし、社会の複雑化に応じて学生が抱える事情は年々多様化し、個別の対応を要するケースが徐々に増えて、短時間の「中文会話倶楽部」だけではキャパシティを越えてしまうようになった。そこで、「中文会話倶楽部」はネイティブの非常勤教員に担当してもらい、そこで対応困難であったり、より丁寧な対応を要するケースは専任教員で担当することにして、間口を広げてみた。その後、自身の中国語学習に関する苦労や経験を踏まえて学生に対応できる非ネイティブの非常勤教員に担当してもらう年度もあったが、参加学生は少なくなった。学生がネイティブとのやり取りを要望していることが分かり、グローバル化の進展を実感した。

ただ、非常勤教員が担当者となっている「中文会話倶楽部」ではどうしても授業の延長としての色合いが強くなり、気軽にコミュニケーションを楽しみたい、中国の文化や社会について中国人から直接話を聴いてみたいという「学生目線」の要望に応えきれていないことが、参加者の声から浮かび上がってきた。そこで、2013年度以降、中国語圏からの留学生（大陸、マレーシアなど）が中心になって運営するスタイルを採用して「互学」的要素を前面に出し、教員はそのサポートに回る形態での運営を試みている。

この形式は今のところ好評で、留学生や日本人学生が学部や学年の壁をこえて集まってくる国際

交流の「場」そのものが魅力的だと、参加者が徐々に増えている。初学者が授業内では十分練習できなかった事柄を復習したり、学んだ内容に基づいて中国の社会や文化に関する話題が話し合われるのはもちろん、最近では中国語圏の政治や経済といった時事的なテーマが話題になることもある。例えば、日中韓の東アジア関係やヘイトスピーチといった敏感な話題から、冬至の過ごし方、流行の音楽、ハロウィーンやクリスマスの浸透度といった身近なテーマについてまで互に関心を持つようになり、生活習慣や価値観の異同を認識するような機会も生まれ、参加学生の満足度は日本人学生・留学生ともに次第に高くなっている。学生が求めているのは〈教授〉ではなく、自発的・能動的な〈学習〉であることがここでも確認される。

2014年度にはさらに、初習中国語を履修し終えた積極的な非ネイティブの学生をスタッフに加えることで、初学者が顔を出しやすい雰囲気を作れるよう模索している。最近では、中国語を履修していない学生も口コミを通じて顔を出すようになり、異文化や多文化に直接触れる機会を求めている学生にとって、魅力的な「居場所」としての機能も兼ね備えるようになってきている。

「ランゲージ・ラウンジ」を狭い意味での語学支援の場と捉えていれば、このような展開は本来のあり方から「逸脱」していると見るむきもあるかもしれない。しかし、語学の背景にある文化や社会事情についての理解を深め合ったり、留学生と日本人との国境を越えたコミュニケーションが日常化することは、「互学」の実践そのものであり、自然な形で「多文化理解」に繋がっていく教育的な空間であると考えている。留学生と日本人学生が主体となって能動的に運営する現在のスタイルを尊重し、そこから生まれてくる新しい展開に期待したい。

2-2 課題と今後の展望

「中文会話倶楽部」を図書館1階のオープン・スペースで実施していた2013年度前半は、学生たちが明るく活発に学習をしたり、意見交換しているのをみて、図書館職員が「理想的な活用の仕方なので是非ここで継続してほしい」と声を掛けてきたことがある。「倶楽部」の参加者たちは逆に目立ってしまうと遠慮したことや、参考図書やパソコンを置いたままにしておけないといった事情もあり、その後は元の教室で実施することになった⁽¹¹⁾。そうした充実した場になりつつある一方で、支援する側として気がかりなのは、参加者に拡がりが見られないことである。運営方法によって差はあるものの、毎回の参加者はおおよそ7、8名から十数名くらいである。これ以上人数が多くなれば、対応策を考える必要が出てくるものの、こうした空間を必要としている学生は相当数いると思われるだけに、顔を出さない大多数の学生たちの支援方法について考えていく必要がある。これが第一の課題である。

「中文会話倶楽部」の告知はチラシを掲示したり、授業中に配付するほか、大学のポータルサイトにも定期的に掲載している。したがって、「倶楽部」の存在についてまったく知らないという学生はそれほど多くはないはずだといえる。ただ、学習内容に自信がなく、留学生や積極的に会話を楽しむ学生に気後れして参加しにくいことも考えられる。もちろん、現在参加していない学生のニーズに合致していない側面や、中国語学習への動機付けが強い学生への働きかけが足りない点も問題であろう。また、参加者の中国語能力をどれくらい高める効果が出ているのかを確認する作業も必要である。ただ、この点はあまり厳密にならず、現段階では「倶楽部」に一定の学生が集まっ

ていること自体を評価し、さらなる学習のきっかけを提供できる「場」であれば十分だとも考えられる。

第二の課題としては、他の支援組織との連携の必要性があげられる。既に指摘したように、「倶楽部」の参加者に拡がりが出れば、喜ばしい反面で誰がいつどう対応するのかという人的・時間的・内容的な制約に直面することになる。担当教員や留学生の個々の努力に依存する部分が大きい現段階では、既に限界に近い。また、多様なニーズに対応するには、キャリア教育としての中国語、中国語圏への留学支援といった分野については、学習相談や学習法の提案などはできても、継続的・体系的な支援は難しい状況にある。

たとえば、就職活動を念頭に置いた中国語の資格取得や中国語圏での企業インターンシップを希望している学生には、キャリア支援課が中心になってプログラムを組んで連携していければ、人的資源の制約も解消できる可能性があるだけでなく、まだ形になっていない学生のニーズを刺激するものにもなりうるだろう。現在行われている語学試験対策講座や学部で実施されているインターンシップは教員主導で推進されているが、キャリア支援課が前面に出ることで、キャリア教育と専門・語学教育の双方を結びつけて考える視点を学生に提供でき、双方を活性化させることに繋がる。

また、中国語圏への語学留学を希望する学生は準備のための学習はもちろん、留学先の選定、具体的な手続きや書類の作成、中国事情の理解などの面で支援を必要としているケースがある。後者については、本学では留学支援業務を担当する「国際センター」で対応が行われているが、「中文会話倶楽部」あるいは中国語専任教員としてフォローする場面も少なくない。たとえば、本学の中国語圏への留学提携先は長期留学が2校、短期留

学も1校しか用意されていないため、学生のニーズと合致しないことが珍しくない。それでも留学を実現したい場合には、自力で留学先を探し、先方と接触して書類も準備するなど、一人では対処しきれない事柄も多い。そうした場合、筆者の元に相談に来て個別に対応してきたケースが何度もあった。履修者数に比してそもそも提携校が少ないことや、提携校以外への留学準備を教員が個別対応している現状は、国際センターと教員との連携を密にしていくことで相当程度改善していける余地が残されているといえる。学生の「内向き」志向が指摘されるなか、大学としてはグローバル化への対応を推進している。留学を働きかけていくうえで教員と国際交流担当部署が連携していければ、いっそう多様で柔軟な対応のために補い合うことが可能になるだろう。

その意味で、何度も言及してきたとおり、現在大学執行部が掲げている「ランゲージ・ラウンジ」の全学化にあたっては、関連部署である国際センターやキャリア支援課との連携を視野に入れて、学生に総合的な支援を提供する拠点としていければ、個別の教職員の努力に委ねられている現体制の限界の克服が期待できる。

3. 中国語授業への正規留学生ラーニング・アシスタント (L. A.) 導入の現状と課題

3-1 設置の経緯

既に述べたように、「教学改革支援制度」の学内助成を受けて、教養教育センターでは2013年度から「学生による外国語相互学習支援システムの構築」プログラム（代表者：嶋田彩司・教養教育センター教授）をスタートさせた。これは、①中国語と韓国語の初習外国語授業のサポート役と

して正規留学生を活用し、②逆に正規留学生が通常授業で必要となる日本語運用能力のサポートを日本語母語話者の学生が担うことで、③大半がアジア圏からの正規留学生と日本の学生との相互理解・交流を促進するという、文字通り「互学」を目指したプロジェクトである。

グローバル化の進展とともに「使える」外国語へのニーズが高まり、ネイティブ教員の授業を受けることへの学生の期待が膨らむ一方で、1クラスの人数が30名を越えることさえある初習外国語授業ではそれに十分応えられない点も多い。多数の学生に対して1人の教員で発音や会話、基本文法などを目標レベルに到達させるのはかなり困難であり、学生も十分な満足度を得られていない現実がある。そこに、正規留学生がL. A.として加わることで、発音の矯正や会話練習の機会を増やすことができれば、履修者の学習意欲を一定程度高めることに繋がると考えた。また、正規留学生は日本語母語話者と同じ授業を履修するなかで、特に「読み書き」能力に課題を抱えていることが多いが、その点を強化する授業はほとんどない。留学生向け「アカデミックリテラシー研究」は例外的な授業だが、一人一人の留学生の「読み書き」能力を具体的に向上させていく上で、現状では担当教員の努力に依存しすぎている面がある。

そこで、学生たちがもつ言語的・人的資源を互いに活用することでそれぞれのニーズに対応し、さらに現実には触れ合う機会の少ないアジアからの正規留学生と一般学生との相互理解を深めていくことを目的にして、L. A. 制度を試験的に導入することになった。まだ導入後2年目の段階で試行錯誤しており、その効果を検討する作業は今後の課題となるが、筆者の担当する中国語授業でのL. A. 活用の現状を確認したうえで、今後の展望を見出していきたい。

3-2 L. A. 活用の現状

中国語授業においては、筆者の担当する「中国語2〔1年次入門〕」「中国語研究1〔2年次初中級〕」「中国語の基礎〔第三外国語履修者向け〕」「特別演習中国語〔1年次初級強化〕」「中国語特別研究〔留学準備〕」の計5コマにL. A.を導入した。2013年度は3名で、Aさん（国際学部4年女）、Bさん（国際学部3年女）、Cさん（経済学部4年女）、14年度は5名で、Dさん（国際学部4年男、春学期のみ）、Eさん（経済学部2年男）、Fさん（社会学部2年男、秋学期のみ）、Gさん（文学部2年女、春学期のみ）のほか、Bさんには13年度に続いて担当してもらった。マレーシア出身のDさん以外は大陸出身者である。

授業中の主な業務は、発音の例示や個別チェック、簡体字や中国語作文の点検、テキストに登場する文化や習慣に関する個人的経験の紹介などがあげられる。L. A.は教員の指示に沿って学生の間を巡回し、学生に直接対応している。なお、L. A.には大学規定の謝金を支給している。

試験導入2年目の現段階で、履修学生およびL. A.留学生に見られる様子や反応は次の通りである。

まず、履修学生にとっては担当教員に質問するより、同じ学生であるL. A.に対しての方が声を掛けやすいためか、導入前に比べて学生からの質問の回数が増えている。文法事項に関する質問は教員の方で回答し、発音などに関してはL. A.が直接対応する。履修者としては、発音、会話、あるいは作文において問題点が指摘され、改善できる機会が増えたことで、満足度は高まっているのではないかと感じている。また、実際に中国人に触れることで親しみを覚え、中国語学習への意欲を高めている学生もいくらか増えている。L. A.

が導入されていない授業と比較して、引き続き L. A. が配置された授業の受講を希望する声もあがっている。とはいえ、義務的に授業に参加している学生にとっては、今のところ特に目立った効果は見られないままである。

他方で、サポート役の L. A. にとっても学ぶ機会の多い貴重な体験となっている。留学生にとって履修学生に対応する際に日本語で説明すること自体が、日本語能力を高めることに繋がる。また、普段自分が使っている母語について思いもしない質問を受けて、母語や自分自身を見つめ直す機会にもなっている。それらを通じて、留学生たちが学びつつある日本語と中国語の違いについての理解も深めているようである。

また、言語面以外のメリットとして、母語について初学者に教えることで、大学内で普段は日本人学生との接点に恵まれず、周辺的な存在である彼らが、L. A. として役に立てる存在であると自己確認できることも喜びとなっている。実際に、L. A. を経験したことをきっかけに、授業以外で日本人学生と交流する機会が増えたと報告してくれた留学生も複数いた。そうした留学生は、どう教えればうまく伝わるかを自分なりに考えて担当教員に相談してくるなど、日本社会という「異文化」への対応を考えるきっかけにもなっている。

3-3 L. A. 導入における課題

大きな課題は、L. A. の訓練機会をどのように確保するかにある。理想的には、事前打ち合わせや訓練を済ませた上で、学期中は毎月指導方針に関する確認やそれぞれが感じている課題などを振り返る機会を設け、学期終了時に全体的な振り返りの場をもち、次年度以降に繋げることが必要と考える。「母語が使える」ことは、ただちに「効果的にサポートできる」ことを意味しないからで

ある。L. A. 導入によって授業効果を高めるには、事前に授業内容に沿って彼らに担当してほしい事柄を伝え、練習をしたり、不安を解消する機会を設けておくことが求められる。また、教員と L. A. との間、及び L. A. 同士で経験を共有し、失敗の教訓を蓄積していくことも重要である。

現状では授業開始前の簡単な確認と、学期終了後の振り返りの場を持てている程度で、学期中に問題点を出し合う機会を持つことがほとんどできていない。その原因としては、L. A. 自身の授業時間割に加えて L. A. を担当している授業を含めると、残りの空き時間で L. A. たちが顔を揃える時間を作ることが容易ではないことが大きい。放課後にはアルバイトや宿題などで多忙な留学生ばかりで、昼休みなど短時間の場では簡単な確認だけに終わってしまう。さし当たっては、授業の前後に担当教員と L. A. とが個別に確認作業をするにとどまっている。

この課題の解決は容易ではないが、L. A. 業務の専門性を考慮し、その内容に見合った謝金を支給することで責任感を持たせ、授業外の研修を含めた契約関係とすることが一つの方向性である。現在のプロジェクトは試験的なものであるため費用的制約があるが、留学生支援業務と連携することで実現可能性を見出せるのではないかと考えられる。

もう一つの課題は、プロジェクトの「互学」的側面をいっそう強化することにある。正規留学生と履修学生との接点は、現状でも一定の効果を有しているとはいえ、授業の「場」のみに限られる関係で、継続性を持っていない。初習外国語の履修生と L. A. 留学生という立場を越えて、初歩的なものであっても日常的に交流し、「支え合う関係」を構築できてはじめて、プロジェクトの趣旨を達成できたといえる。そのための一助としては、

ランゲージ・ラウンジと授業との連携が考えられる。L. A. には基本的にランゲージ・ラウンジに参加してもらい、履修学生にはランゲージ・ラウンジに参加することを通じて仕上げられる課題を出すなどの方法を模索していきたい。そのためにも、ランゲージ・ラウンジの常設化によっていつでも利用できる空間を用意する必要があるといえる。

4. 亜細亜大学「アジア夢カレッジ——キャリア開発中国プログラム——」を事例に

以上のように、本学における「互学」を基本指針とした教学改革においては、それぞれの部署や担当者が個別に努力を重ねてきている一方で、人的資源や制度面でさらなる工夫を行う余地があることを確認してきた。その方向性としては、プログラムや部署間での連携を高めることに考えている。それによって、学生自身も、専門教育はもちろん語学、留学、キャリア教育が別々のものではなく、一体のものであると認識して取り組んでいく視角を獲得することが可能になるだろう。

筆者はこうした問題意識から、他大学における優れた先行事例に着目し、数年前から訪問調査を重ねてきた。以下では、亜細亜大学における取り組みを検討し、本学で推進している改革が抱えている限界を克服するための視点を提示していきたい。

4-1 「アジア夢カレッジ」の概要と部署間の連携の実態

2004 年度から開始された亜細亜大学の「アジア夢カレッジ」は、中国語教育をベースに海外留学とキャリア教育を融合させた領域横断的なプロ

グラムである。「4 年一貫の産学連携教育」「大連への留学」「海外ビジネスインターンシップ」を 3 つの柱としており、本稿の問題意識からすれば、単なる海外留学の枠組みを越えてキャリア形成を強く意識していること、海外インターンシップという目標に向けて高い語学力を養成する中国語教育を実施している点が注目に値する。2 年次後期に大連外国語大学で 150 日間の語学留学を行い、最後の 1 ヶ月間は現地企業でのビジネスインターンシップを行うことがメインであり、その前後の期間にも体系化されたプログラムが用意されている。

まず、教育支援体制について確認していく。

「アジア夢カレッジ」プログラムは毎年 15 名～30 名程度と少人数で構成されるものの、特定の学部やコースに限定されることなく、ほぼ全学部学科に開かれた編成になっており、所属学部における専門教育と「アジア夢カレッジ」プログラムを並行して受講する「ダブルメジャー教育」を特徴としている。こうした編成上、学生および教員は学部の枠を越えた教育交流を展開していくことになる。教員は、各学部学科のカリキュラムと学部横断的な「アジア夢カレッジ」のプログラムを毎年のように整合的に調整していくことが求められる⁽¹²⁾。

教室レベルではゼミおよび中国語教育における少人数教育が徹底され、留学だけでなく海外インターンシップに要する実践的語学力を入学後 1 年 6 ヶ月という短い期間で養成する体制が採られている。1 年次のゼミ教育では学外でのフィールドワークを重視し、各自でテーマを設定して「現場に学ぶ」姿勢を身に付け、大連でのインターンシップの目的意識を明確にしていく。つまり、単なる留学・中国での企業体験ではなく、各自の専門分野に基づく研究テーマを深める機会として留学・

インターンシップが位置付けられている⁽¹³⁾。1年次の夏休みには国内の企業現場での合宿も行い、研究成果報告書を作成したうえで、産学連携における協賛企業の関係者も交えた場で報告会が行われている⁽¹⁴⁾。

中国語教育においては、1年次終了時点で中国語検定3級以上の取得が留学派遣の必須要件とされている。大連での企業インターンシップを伴うプログラムであるためこの条件は厳格に適用され、「アジア夢カレッジ」参加学生（以下、「夢カレ生」）の半分程度しか留学に派遣できなかった年度もある（2006年度、2009年度～2012年度）⁽¹⁵⁾。語学学習の動機付けとしてキャリア教育が機能している点は非常にユニークである。是非は別にして、就職活動を意識した学習へのニーズが高まっている学生の状況を考えれば、参考にすべき点であろう。

大連外国語大学漢学院への留学中は、教室での中国語の授業はもちろん、学生寮で中国人のルームメイトと共同生活を送ることから、たえず中国語を使う環境に身を置く。ルームメイトは日本語を学んでいる現地学生であるため、「お互いに相談し使用言語のルールを決め協同生活に臨む」ことになり⁽¹⁶⁾、異なる文化的背景をもつ相手との共生についてリアルに学んでいく機会にもなる。また、留学中に中国政府主催の HSK（漢語水平考試）5級（英語では「実践ビジネス英語」レベル）の取得を目指すことで、留学期間の最終段階に待ち構える企業インターンシップに対応できる語学力の習得に備えていく。2011年度は56%、2012年度は80%の夢カレ生がこの目標を達成していることに示されているように⁽¹⁷⁾、教育効果はきわめて高い。

留学先では語学の授業の他にも「中国の生活と仕事」といった講義を受講し、大連で働く日本人

の様子や中国における日系企業の状況なども学んでいく。実際にインターンシップを行うことを前提にして受講する「キャリアデザイン」関連講義は、キャリア意識の啓発を目的に行われる一般的な講義に比べて、学生が主体的・能動的にキャリア意識を構築していくことに繋がりやすい。なお、留学中は担当教員が大連を訪れて指導や相談を行うほか、現地でも国際交流担当の職員を雇用して学生のサポートを行っており、教職員が部署の垣根を越えて協力することで高度なプログラムが機能している⁽¹⁸⁾。

インターンシップでは、東芝、伊藤忠、三島食品等の日系企業の大連事業所や、中国国際旅行社などの中国系企業、JETRO 大連事務所等の公的機関などで1ヶ月間の実習を経験する。「夢カレッジ」1期生からの9年間で日系企業18社、中国企業7社、韓国系企業1社に、3つの公的機関を加えた計29箇所が受け入れ先となり、131名の夢カレ生が実習を終えている⁽¹⁹⁾。インターンシップ協力企業・機関の開拓には、担当教員とキャリアセンターが協力して当たっている。インターンシップ先では基本的に1名ずつでの実習となるため、現場での対処はすべて中国語で行い、学生が自ら考え行動する力を培う機会となっている。

帰国後も一貫したプログラムのなかで取り組みが継続する。帰国直後には協賛企業の関係者や教員・学生の前で留学・インターンシップ報告を行い、3年次後期にはさらに国内でのインターンシップの機会も設けられている。ここでも、担当教員に加えて国際交流およびキャリア支援の担当者が協力して支援を続けている。年度によって異なるが3年次後半から4年次にかけて行われる実際の就職活動では、夢カレッジプログラムで培った経験や能力が企業から高い評価を得て、就職率100%を達成している⁽²⁰⁾。

1 年次から学生たちが取り組んできた個別テーマは留学期間中の現地調査やインタビュー、アンケートなどを踏まえて、専門科目担当教員の指導の下で卒論として完成させる。卒論の成果は「アジア夢カレッジ」の最終報告を兼ねて発表会が開催され、そこでも協賛企業の関係者のほか学生や一般参加者も交えてコメント・意見交換を行い、4 年間を通じた産学連携教育が完結する⁽²¹⁾。

4-2 教育成果および教育組織としての成果

筆者はこれまで、2009 年 6 月の国際交流課担当職員への聴き取りを皮切りに、担当教員からの聴き取り、「アジア夢カレッジ・中国語スピーチコンテスト」「アジア夢カレッジ・成果報告会」等への参加を毎年のように重ねてきた。

同プログラムの成果について、本稿と関連付けながら記しておきたい。

第一に、留学前段階の語学力が高いことである。「中国語スピーチコンテスト」に参加して、入学後 1 年半で学生たちが身に付けた中国語によるスピーチを耳にしたが、受け身で授業を受けているだけでは習得できるレベルではなく、一定のコミュニケーションが可能なレベルに達していることが確認できた。スピーチの内容も、留学中の生活を意識した具体性のあるもので、聴き手にアピールできる水準となっている。語学の習得において、留学やインターンシップ、検定試験合格など目的意識が明確であることの重要性が伝わってくる。

第二に、留学によって中国に対する認識が変わり、自分を見つめ直す機会を得ていること。中国を訪れるのも初めてという夢カレ生が少なくないなか、生活習慣や発想の違いに驚くことは当然何度もある。驚くだけでなく、ルームメイトと生活を共にし、あるいは企業で就業体験をすることで、次第に違いを受け入れるようになり、それによっ

て自分が一回り成長したと感じている学生も多い。中国語が使えるようになった達成感も大きいですが、それと共に、異なる世界に触れて「ものの見方」に拡がりが出たことが、今後の学業や社会人になってからの財産となることを学生自身も予感している。

ある夢カレ生は、帰国後の感想記にこう記している。「中国人は冷たくて自己中心的だというイメージを持っている人が多いが、それは間違いである。彼らは情に熱くとても親切だ」と、風邪を引いたときや頼み事をした時の自分の実際の体験をもとにして記しており、「留学を通し、実際にたくさんの中国人の温かさに触れ、私の中の中国人のイメージが変わった。何の根拠もなく勝手なイメージを持っていた自分は間違っていた」（国際関係学部 2 年女）と振り返っている⁽²²⁾。既存の中国・中国人イメージを引きずっている学生も見られるものの、こうした気付きに言及している夢カレ生は少なくない。学ぶということが本来的には自分の思考枠組みを更新し続ける作業であり、だからこそ更なる学びが駆動することにあらかじめ気付かされる。語学教育がキャリア教育や海外留学とリンクする形で展開されているがゆえに得られる教育効果であるといえる。

第三に、留学を終えた後も、学生たちが専門教育や国内インターンシップ、中国語の学習、卒論作成などに精力的に取り組んでいること。報告会で発表している学生たちは、一般学生に比べてハツラツとした姿が印象的である。その要因として、留学中に接した中国人学生や他国からの留学生の積極的な学習姿勢から、自らの学習のあり方を見直したことをあげる夢カレ生が少なくない。中国人学生の日本語学習に対する熱心さや、韓国からの留学生が授業以外でもほとんど韓国語を使っていない様子を目の当たりにしたある夢カレ生は、

「それに比べ私たち日本人は、中国語の授業以外ではいつも日本語を使い、中国語を使おうとする意識がとても低かったと思う。この意識の違いから、中国語能力の差が生まれるのであり、私たちは自分で意識し、変えていかなければならなかった」と記している⁽²³⁾。「互学」は通常授業はもちろん、留学の場でも重要な役割を果たすことが分かる。

次に、教育組織としての成果を確認しておく。

以上のような有意義な経験が得られるプログラムが、休学や留年を必要とせず、4年間のカリキュラムの一環に組み込まれていることで、「夢カレッジ」プログラム参加への障壁は低くなっている⁽²⁴⁾。こうしたカリキュラムを構築・維持するには、各学部の教員やキャリア担当、国際交流担当職員同士の有機的な連携がなければ成り立たない。

また、「アジア夢カレッジ」プログラムが触媒となって、新たな組織展開が生まれている点も特筆すべき点である。2012年度から国際関係学部の新設された「多文化コミュニケーション学科」は、3年次に「多文化インターンシップ」「多文化フィールドスタディ」を行うコースとなっているが、これは「夢カレッジ」の「ビジネスインターンシップ」や留学先でのインタビュー調査などの経験を応用したカリキュラムである。筆者は2014年11月に行われた初めての「多文化インターンシップ・フィールドスタディ報告会」にも参加したが、学生たちが「夢カレッジ」と同様の「気付き」を得ていたことが確認できた。

同じ2012年には、文部科学省「グローバル人材育成推進事業(B)特色型」に、国際関係学部が応募した「行動力あるアジアグローバル人材」が採択されている。これは「夢カレッジ」プログラムの取り組みが評価されたもので、他地域で同様の

プログラムを展開する準備も進められている⁽²⁵⁾。

グローバル人材の育成に取り組んでいるのは日本だけではない。「夢カレッジ」のカウンターパートである大連外国語大学は、これまで夢カレ生を「受け入れ」ているのみだった。外国語教育についてのニーズの多様化に伴い、2009年度から同大学の学生が3年次編入の形で亜細亜大学に留学するようになった。これまでに83名が2年間の留学を済ませており、「双方向的」な協定関係へと発展している。また、中国でも学生の就職難が問題化しており、中国人編入生の日本でのインターンシップの準備も進められている⁽²⁶⁾。

おわりに

以上のように、専門教育、語学教育、留学支援、キャリア教育といった一般的には個別の組織や担当者によって取り組まれることの多い分野の有機的な連携によって、「アジア夢カレッジ」プログラムという領域横断的な取り組みが実現されてきた。夢カレッジ担当教員によれば、現在では「随分と学内の組織間の垣根は下が」ってきたものの、さらなる柔軟性が求められる側面も残されているという。教員の間には専門教育に特化して、グローバル化に対応するための教育は一部の担当教員に任せたいという風潮が根強く、職員の間でも対応が難しい海外業務を回避して、一般的な安定した業務に集中したいという雰囲気が残っていると指摘する⁽²⁷⁾。それでも、大学の組織自身が学部や担当部署を横断して変化に柔軟に対応しようと自己変革を重ねてきた結果、10年以上にわたって継続され、学生からも企業からも高い評価を得るプログラムが維持されてきた。学生だけでなく大学組織がまずグローバル化に対応した〈構成主義的〉な体質へと改革していくことの重要性を物語っ

ており、本学が進めている改革に何が必要なのかを示唆しているといえる。

註

- (1) 近年の代表的なものに、鈴木慶夏「非専攻中国語教育からみた“把”構文教学の現状と課題：“把”構文の何が難しいのか」『中国語教育』（中国語教育学会）8号，2010年3月，127-156頁；王振宇「関于“了”的習得情况調查和教学策略」『中国語教育』12号，2014年3月，69-88頁。
- (2) 2013年6月に開催された中国語教育学会第11回全国大会のワークショップ・テーマは「デジタルで授業を豊かに！」であった。この分野を代表する研究者の一人である清原文代は、若者に人気の iPod や iPad に中国語学習教材をインストールして学習の幅を広げる取り組みを重ねている。清原文代『リズムで学ぶ三文字中国語：iPod 徹底活用！』アルク，2007年を参照。また，外国語教育全般にわたる同様の試みを取りまとめた吉田晴世・松田憲・上村隆一・野澤和典編著『ICTを活用した外国語教育』東京電機大学出版局，2008年も参照。
- (3) 植村麻紀子「21世紀型スキルの養成と中国語教育：『つながる』をキーワードに」『中国語教育』10号，2012年3月，105-125頁。中国語教育学会の学会誌に掲載されている教育法に関する論考には同様の問題意識から執筆されたものが多く，近年のものだけでも，當作靖彦「新しい時代の外国語教育：その位相の変化と目標領域の拡大」『中国語教育』11号，2013年3月，6-19頁；寺西光輝「中国人留学生と日本人学生による協働学習：中国語文献のピア・リーディングを通して」『中国語教育』11号，2013年3月，67-87頁などが挙げられる。中国でも同様の問題意識で中国語教育を考察する論考が見られる。例えば，沙杰「建築主義理論在対外漢語教学与学習中的应用」劉曉天編『漢語教学与研究論叢』首都師範大学出版社，2011年，50-53頁。また，コミュニケーションを重視した教育法の開発においても，同様の問題意識がベースになっているものがある。例えば，胡玉華『中国語教育とコミュニケーション能力の育成：「わかる」中国語から「できる」中国語へ』東方書店，2009年を参照。
- (4) 例えば，2012年度第18回FDフォーラムの全体テーマは，「学生が主体的に学ぶ力を身につけ

るには」であった。

- (5) 鶴殿博喜「2013年度外部評価委員会の提言について（回答）」（2014年12月19日）：http://www.meijigakuin.ac.jp/guide/university_assessment/gaibuhyouka/hyoukaiinkai/2013teigen_kaito.pdf
- (6) 本間政雄「明治学院大学2013年度外部評価委員会の提言」（2014年3月22日）：http://www.meijigakuin.ac.jp/guide/university_assessment/gaibuhyouka/hyoukaiinkai/2013teigen.pdf
- (7) 鶴殿博喜「2011年度外部評価委員会の提言について（回答）」（2012年11月16日）：http://www.meijigakuin.ac.jp/guide/university_assessment/gaibuhyouka/hyoukaiinkai/2011teigen_kaito.pdf
- (8) 鶴殿博喜「2012年度外部評価委員会の提言について（回答）」（2013年11月29日）：http://www.meijigakuin.ac.jp/guide/university_assessment/gaibuhyouka/hyoukaiinkai/2012teigen_kaito.pdf
- (9) 明治学院大学「2013年度自己点検・評価報告書」：http://www.meijigakuin.ac.jp/guide/university_assessment/jikotenken/torikumi/2013/2013jikotenkenhyokahokokusho.pdf
- (10) 前掲鶴殿「2013年度外部評価委員会の提言について（回答）」。
- (11) 詳細は別の機会に譲るが，同様の取り組みとして関西外国語大学の「中国語ラウンジ」を2013年4月に訪問調査したことがある。中国語学習者のための常設スペースで，20人程度は十分に収容できる広さを持ち，中国人留学生や中国語を学ぶ学生たちがふらりと顔を出していた。気軽な会話だけでなく，中国語に関する質問が留学生を交えてやり取りされ，留学生が感じた日本語に関する疑問も教え合ったりするなど，「互学」の交流が自然な形で活発に展開されていた。また，それを支える仕組みとして，中国人留学生が当番制のスタッフを務めていた。こうした学び合いが可能となっている要因の一つに，関連図書，黒板，パソコン，テーブルや椅子が備わっている空間をいつでも自由に使えることがあげられる。本学で準備が進んでいるランゲージ・ラウンジの全学化において参考にしたい点がいくつも見られた。
- (12) 三橋秀彦『『アジア夢カレッジ』：4年一貫の産学連携によるキャリア開発中国プログラム』（未公開PPT資料），大学改革フォーラム（第6分科会「グローバル化」）（明治大学），2013年8月

- 9 日, 17 頁。
- (13) 西澤正樹「『考動力』を培う『アジア夢カレッジ』」ウェブマガジン『留学交流』35 号, 2014 年 2 月号, 5 頁: <http://www.jasso.go.jp/about/documents/201402nishizawamasaki.pdf>
- (14) 前掲三橋, 10 頁。
- (15) 前掲三橋, 7 頁。
- (16) 前掲西澤, 3 頁。
- (17) 前掲三橋, 11 頁。
- (18) 前掲三橋, 9 頁。
- (19) 前掲西澤, 3 頁。
- (20) 前掲三橋, 14 頁。
- (21) 前掲西澤, 2 頁。
- (22) 『大連留学・ビジネスインターンシップ報告書: 2013 年度「アジア夢カレッジ」大連留学・ビジネスインターンシップ』『アジア夢カレッジ』第 9 期生, 2014 年 7 月, 135-136 頁。
- (23) 同上, 96-97 頁。
- (24) 前掲三橋, 4 頁。
- (25) 前掲三橋, 18 頁。
- (26) 前掲三橋, 15 頁。
- (27) 前掲三橋, 17 頁。